

JICA 緒方研究所・第三者評価委員会（第13回）概要

1. 日時：2023年7月27日（木）9:30～11:30
2. 場所：JICA 緒方研究所 4階400号会議室及びオンライン接続
3. 出席者

【委員（五十音順）】

大東文化大学国際関係学部 齋藤 百合子 特任教授
東京大学大学院 城山 英明 教授
関西学院大学総合政策学部 西野 桂子 教授（委員長）
法政大学法学部 弓削 昭子 教授（欠席）¹

【JICA 緒方研究所関係者】

研究所長 峯 陽一、副所長 宮原 千絵、次長 小塚 英治、各領域長 他

4. 議事概要

開会挨拶の後、第三者評価委員の互選により西野委員の委員長就任を確認した。その後、西野委員長による議事進行の下、まずは、JICA 緒方研究所から「2022年度 JICA 緒方研究所活動報告」に基づく説明・報告がなされた。その後、各委員からのコメント及びそれに関する意見交換並びに JICA 緒方研究所からの補足説明がなされ、最後に委員長が総括を行った。概要は以下のとおり。

●人間の安全保障、SDGs への取組について

・新たな時代の「人間の安全保障」が、改定された開発協力大綱の基本方針の一つに掲げられ、国連でも関心を持たれているとのことだが、実際にどの程度浸透しているのか。また、人間の安全保障という概念のどういう側面が現代的に受け入れられたのか、今後さらに浸透していく上で何が重要か。

・人間の安全保障は、保健や貧困などの個別分野を横断的・複合的につなげて実現することが必要だが、その方法は地域によって異なるはず。地方の実情に沿った人間の安全保障を考えると、どの分野に優先順位をつけるのかという課題がある。

・ポスト SDGs に関する議論の中身や、2030 年を見据えたときに次のフレーズとして何が重要になると考えるか。

・人間の安全保障に関する様々な発信を行ったことは、研究所のプレゼンスを大きく高めたと評価する。

・ポスト SDGs について緒方研究所はどのような準備をしているのか。SDGs の指標を概念整理すること、SDGs の中に人間の安全保障を打ち出していくこと、英語で海外発信していくことなどは、非常に重要。

¹ 弓削委員は、急遽欠席となったため、後日、個別に報告した。

・人間の安全保障に関する充実した研究をこれからも継続してほしい。アフガニスタン、ウクライナ、ミャンマーなど世界各地で紛争や戦争が起き、国家の安全保障が人間の安全保障より重要視される社会風潮の中でこそ、人間の安全保障の重要性を強く訴えるべき。

《JICA 緒方研究所からの説明》

・人間の安全保障について、開発協力大綱の改定に関する有識者懇談会では、概念に関する議論は限られていたが、最終文言には盛り込まれた。これは、様々な脅威やダウンサイドリスクに敏感に対応せねばならない状況にあって、誰も取り残されないインクルーシブなアプローチにより、マルチステークホルダーで連帯を組織していかねばならないことが人間の安全保障であるとの共通認識が、外務省関係者を含めて広く定着し、概念として成熟しているためだと思われる。

・本年 7 月に国連のハイレベル政治フォーラムで各国代表と対話した際には、若者の活力で実現する未来志向のサステナビリティに焦点が当たっていた。そのような若者に焦点を当てたサステナビリティや、平和や DX 等主要なアジェンダに横串を通すツールとして人間の安全保障の概念が使えるのではないかと思う。

・人間の安全保障を地域固有の価値観とどのようにつなげていくかも重要で、緒方研究所では、アフリカや中東における人間の安全保障の研究プロジェクトを立ち上げようとしている。地域ごとの価値観や 이슈 に立脚したリージョンベースの研究プロジェクトをまずは行い、最終的に世界を覆うような研究にしたい。

・日本型の人間の安全保障は英語での発信が弱いため、グローバルにインパクトのあるアジア流・日本流の人間の安全保障をしっかりと打ち込んでいく役割を担いたい。

・国家の安全保障が問われている時代だからこそ人間の安全保障の重要性を唱えるべきとの指摘に全く同感。人間の安全保障は、平和のアジェンダなので平和研究とも連携できる部分もあり、しっかり取組を進めていきたい。

・人間の安全保障の重要性は浸透してきているものの、昨今の人間の安全保障の議論では、時代の変化への対応も問われている。パンデミックが経済危機に結びついたコロナ禍の経験を経て、保健・医療分野のコロナ対策だけでは十分な対策にはならないとの認識に辿り着いている。そうした複合的な課題への対処も重要だというのが今の新しい動きだと感じている。

・ポスト SDGs 研究について、指標のフレームワークの研究を行っている。SDGs の指標全てについてデータを出している国は先進国でも無く、日本も 6 割ほどしか出せていない。特に、途上国のデータ収集負担は大きい。整備できていないデータが多く、整備されているデータも比較可能性に難がある点において、SDGs の現行指標はモニタリング指標として機能していない実態があるため、2030 年以降の新しい開発目標を見据えて導入すべき指標フレームワークを研究の中で検討している。

・ポスト SDGs については、国連 100 周年をも見据えて長期的な視点で考え、そこに人間の安全保障をリンクさせていく必要があると考えている。ただし、SDGs の折り返し地点にある今この時にポスト SDGs の議論を大々的に始めるのは SDGs を軽視するような印象を与えかねない。SDGs 達成に関する中間評価においてその手法や課題を丁寧に研究し、その見直しの先にポスト SDGs の議論が出てくるものと考えている。

●研究活動全般について

- ・緒方研究所では、人間の安全保障、SDGs、複合危機など複数の領域にまたがる研究をどのようにマネジメントしているのか。
- ・科学技術政策分野の研究では、分野横断的な事業をどのように調整していくかが課題となっている。全体を見る企画系部門が最初に全体を仕切ることが重要だが、その後、エネルギーや交通など個別分野の部門がオーナーシップを持って他分野と連携していくようにうまく引き継ぐことが重要と聞いたことがある。
- ・複合危機に関する研究はさらに推進していただきたい。
- ・歴史的な経験をまとめている点も評価する。
- ・人間の安全保障や平和構築研究において、力の非対称という観点をもっと取り入れてはどうか。
- ・移民の外国送金に関する研究は、正の側面を実証的に明らかにしたものだが、国際的には、移民は政治・経済的に弱い立場にあり、コロナ禍で負の影響もあったとも言われている。緒方研究所の研究では、負の影響は分析していないのか。
- ・FOIP 関連の研究はタイムリーな動きであり、今後の進展を期待する。
- ・2022 年度の新規プロジェクトや準備中案件はどのような経緯から形成されてきたのか。例えば準備中案件の中で「ウガンダにおける若者の望まない妊娠低減介入研究」のみ特定国の名前が出ており、なぜウガンダなのか唐突な印象を受ける。

《JICA 緒方研究所からの説明》

- ・人間の安全保障レポートでは、所長、副所長、企画課長が編集委員となり、緒方研究所の全ての領域が参加する形でレポートを作成している。
- ・複数の領域にまたがる研究をどうマネジメントするかは非常に重要な課題。人間の安全保障は全ての領域に関わるので全体で取り組む素地はできている。他の研究についても、複数の領域による連携の方法を検討したい。
- ・移民による海外送金に関する研究では、COVID-19 に伴う大規模な移動制限にもかかわらず移民からの送金は増え、移民送金を受け取る本国の家族にとってはショックを和らげる大きな正の効果があったことを幾つかの国で実証的に検証しているが、移民にとってコロナ禍による負の側面がなかったとする趣旨ではない。人間の安全保障レポートにおいても、移民の労働環境の問題や、女性海外労働者と本国に残されたその家族の問題についても検討すべきとの指摘をしている。移民問題や、日本における外国人労働者の受入れ問題についても関心を高く持っているので、できることをさらに検討したい。
- ・新規研究プロジェクトの検討プロセスについては、人間の安全保障やポスト SDGs など国際社会の潮流を踏まえてトップダウン的に立ち上げる案件と、研究員の関心に基づきボトムアップの提案で立ち上がる案件とがある。
- ・ウガンダの若者の望まない妊娠の介入研究は、コロナ研究でウガンダの研究者や保健省の方々と接する中で、現地で非常に大きな問題になっていることがわかり立ち上げた案件である。介入研究は費用がかかるのでウガンダだけを対象としているが、研究成果のディスカッションなどにはサブサハラの周辺国を含め、幅広い関係者と議論をするこ

とを想定している。

●研究成果の発信について

・従来のワーキング・ペーパーを、リサーチ・ペーパーとディスカッション・ペーパーの2つに整理したが、2022年の発刊数は実質的には2021年と同数にとどまっている。今後、ディスカッション・ペーパーがより柔軟な形が出る方向に向かうのか。

・昨年度の委員会では、実務的な機関に置かれている研究所として実務へのフィードバックを重視し、ポリシー・ノートを増やすべきとの意見があったが、現状は増えていない。他方、活動報告書(P.28)でフィードバックの形態を見ると、ポリシー・ノートという形でのフィードバックはごく一部だが、その他の様々なフィードバックの形態があることが理解できる。多様なフィードバックの形態を評価する仕組みを考えてもよいと思う。

・第5期中期計画の初年度に当たる2022年度の年間計画の下、研究成果の発刊数が年度計画の基準値を上回るなど着実な成果を挙げている点を高く評価する。

・事業へのフィードバックの方法として、ポリシー・ノート以外にも様々な方法がある。JICA職員が緒方研究所の研究成果をどのように活用しているかを総括し、今後のフィードバックの方法を検討するためのアンケート調査を実施してはどうか。

・中期計画や年度計画において「国民に対して」という記載がある。緒方研究所の研究には公的資金が使われていることも踏まえ、税金がどう使われているのか、研究成果が一般国民にどう関係するのを見えやすくする工夫することが望ましい。

・緒方研究所の動画2本を見たところ非常に分かりやすく、学生の理解の足掛かりとしてよいと感じた。

・緒方研究所のホームページや第三者評価委員会の活動報告書を見るとジェンダーに関する研究が足りない印象を受けるが、実際にインターネットで検索するとジェンダーに関する研究成果を複数確認することができた。せっかく研究しているのに表に見えないのはもったいない。国際的な視点では日本はジェンダー研究で遅れているとされがちで、緒方研究所もジェンダーの研究が遅れているような誤解を与える可能性がある。見せ方の問題であり、ジェンダーだけでなくいろいろな切り口で成果を見せられるようにしてはどうか。

《JICA 緒方研究所からの説明》

・ご指摘のとおり、リサーチ・ペーパーとディスカッション・ペーパーの発刊数は前年度のワーキング・ペーパーと実質的に同数にとどまったが、その一因は査読付ジャーナルへの投稿を重視したことであり、査読付ジャーナルの実績は大幅に増えている。査読付きジャーナルへの投稿と並行して、ディスカッション・ペーパーを通じて研究成果を迅速に発刊することも強化していきたい。

・どの研究機関でも査読付き学術誌へ投稿を志向する傾向にあるが、学術誌に必ずしも馴染まない研究も重要であり、緒方研究所のリサーチ・ペーパーでそのような研究を発刊する意義はある。

・事業へのフィードバックについて、事業関係者にとっては、大量の資料を読む中で、長

い資料を読みこなす時間がなかなか取れないため、簡潔な資料を必要としているのが実情だろう。政策決定者・事業関係者が研究成果を理解し、それを事業に反映させるためには、ポリシー・ノートをよりわかりやすい構成・内容にすることも重要であり、引き続き工夫・努力を継続したい。

・緒方研究所の研究成果はしっかりとした分析に基づいているので信頼性は高いが、ご指摘のとおり、ポリシー・ノートが実務の現場にどう浸透したか、事業関係者が何を参考にしているのかを把握することは重要。ご提案いただいたアンケート調査について前向きに検討したい。

・一般向けの研究成果発信の一つに緒方研究所ホームページがある。イベント開催時の実施報告や動画を提供しており、より分かりやすく発信方法も考えていきたい。

・最近の取組として、コラム&インタビューというものがある。これは、論文をそのまま提示するだけではなく、実務者や一般の人でも分かりやすいような形で論文の内容を咀嚼して書き下ろすというもの。気候変動適応策の案件等で新たに試みようとしている手法を分かりやすく紹介したり、モロッコの地方道路整備事業に関する資産レベルや性別などによる裨益の差を分かりやすく解説したり、研究手法の一つであるRCTの意義をインタビュー形式で専門の研究者が解説したりしている。

・動画制作にも注力している。最近の事例として、債務問題を取り上げたナレッジフォーラムがある。JICAならではのネットワークを活用してスピーカーを集め、社会から注目を集めている債務問題についてのセミナーを開催した。さらに、その場でセミナーに参加できない人のために、YouTube動画でも発信することにより、実務者や一般市民等、幅広い関心層に分かりやすくかつアクセシブルな情報提供ができています。

・ジェンダーについてはご指摘のとおりで、研究においてジェンダーの視点を持つことが当たり前になって、わざわざ言及しなくなっている面がある。ジェンダーの視点で改めて研究成果をまとめれば新しい知見や成果の積み上がりが見えてくるので、研究成果の見せ方について検討したい。

●その他全般

・第三者評価委員会のために、緒方研究所が1年間の活動をレビューされ、事前報告を実施した上で、そのコメントを受けて、さらに真摯に検討・対応されていることに感謝している。

・昨年度の指摘項目に対しても真摯に対応していることを評価する。

5. 委員長総括

西野委員長により、今次委員会の主要論点が以下のとおり整理された。

- ① 第三者評価委員会のために緒方研究所がしっかり準備し、また、昨年度の委員会の指摘項目に対し真摯に対応していると評価する。
- ② 第5期中期計画の初年度に当たる2022年度の年度計画の下、研究成果の発刊数が年度計画の基準値を上回るなど、着実な成果を挙げたと高く評価する。
- ③ フラッグシップレポートである『今日の人間の安全保障』について、様々な機会を通じて発信されたことは、JICA 緒方研究所の比較優位性並びにブランドを高めていると評価する。今後は特に英語での更なる発信強化を期待する。

- ④ 複合危機に関する研究をさらに進めていただきたい。
- ⑤ 複数領域にまたがる研究テーマをどうマネジメントするか検討することが望ましい。
- ⑥ 緒方研究所の研究成果出版物の中で、特にディスカッション・ペーパー及びポリシー・ノート の発刊数が増えていくことを期待する。
- ⑦ 国民に対して分かりやすい説明を動画などで発信していると評価する。
- ⑧ JICA 内で研究成果がどのように活用されているかを把握するためにアンケート調査を実施してはどうか。
- ⑨ ジェンダーの研究について、主流化した反面、その成果が見えにくくなっている。ホームページや活動報告に反映するなど工夫してほしい。
- ⑩ 国際開発学会を含む学会発表も増加し、外部からの評価が高まるなど、JICA 緒方研究所のプレゼンスを高めていると評価する。
- ⑪ 新しい研究案件について、トップダウン、ボトムアップなど様々な経緯により選定されていると理解した。移民に関する研究、ポスト SDGs に関する研究、FOIP に関する研究など興味深い研究が増えていると評価する。

以上